

所 属・職 位	福祉健康科学部 福祉健康科学科 理学療法コース・教授	
氏 名	兒玉 雅明 (Kodama Masaaki)	
取 得 学 位	博士 (医学)、大分医科大学、1994年3月	
SDGs 目標		

研 究 分 野	生物系、医歯薬学、内科系臨床医学
研究キーワード	上部消化管学 (食道、胃、十二指腸)、消化器内視鏡学、 <i>Helicobacter pylori</i> 、胃癌、消化器内科学

研 究 内 容	<i>Helicobacter pylori</i>と胃炎、胃癌に関する研究 <i>Helicobacter pylori</i> (<i>H. pylori</i>)は胃炎および胃癌の発生原因となることが指摘されている。<i>H. pylori</i>感染により引き起こされる慢性萎縮性胃炎、腸上皮化生は胃癌の前癌病変とされ、本病変に与える除菌治療の効果を検討してきた。すなわち、感染自体による胃粘膜の形態変化、また<i>H. pylori</i>除菌による胃粘膜の変化、すなわち萎縮、腸上皮化生の経時的变化、免疫組織学的な細胞動態、粘液性質、消化管ホルモン発現の変化、そして細胞周期関連遺伝子、癌遺伝子産生蛋白の変化を病理学的、遺伝子学的に追跡し、<i>H. pylori</i>感染と除菌治療による胃粘膜の形態変化、除菌後にできた胃癌特性の解明による除菌後胃癌早期発見早期治療に向けた取り組みを行っている。 特に除菌後長期にわたる胃粘膜の組織学的解析は20年以上にわたって行っており、本学で<i>H. pylori</i>検査、除菌を行ったおよそ10000例近い症例の組織を用いた研究を行っている。
---------	--

研 究 業 績・アピールポイント	<i>H. pylori</i>除菌治療は胃粘膜の炎症、萎縮、腸上皮化生に変化を与えることが示唆されている。除菌後10年間から17年間の長期にわたる研究にて胃粘膜の炎症、活動性は除菌後に速やかに改善し、萎縮も徐々に有意な改善を示した。腸上皮化生は胃体小弯のみ6年後より有意な改善を認めた。国際的胃炎分類のシドニーシステムに従って胃の5点から毎年継続的に10年の長期間経過を追った報告は他にはない。ピロリ菌感染症の保険適用拡大に大きく影響を与えた。Kodama M, et al. Ten-year prospective follow-up of histological changes at five points on the gastric mucosa as recommended by the updated Sydney system after <i>Helicobacter pylori</i> eradication. J Gastroenterol. 47: 394-403, 2012. 除菌後17年間の解析で、萎縮は除菌1年後からの有意な改善を認めた。腸上皮化生は期間を通して有意な変化を認めなかった。男性は女性より腸上皮化生が高度で胃癌高リスクが示唆された。腸上皮化生を有す症例、男性において除菌後胃癌リスクへの注意したフォローが必要と考慮された。Kodama M, et al. Gastric mucosal changes, and sex differences therein, after <i>Helicobacter pylori</i> eradication: A long-term prospective follow-up study. J Gastroenterol Hepatol. 36(8):2210-2216, 2021.
------------------	--

